

今回はジャズピアニストの中で最も多くのリスナーを惹きつけてきたビル・エヴァンスについて解説します。活動歴が長く、共演者が多岐に渡ることに加えて、音楽性も変化しているため簡単には書けないテーマです。何より音楽性が高度なので、間違っただけを書き留めてしまわないかという不安もなくはないのですがチャレンジします。色々な面から焦点を当てようと思っているので何回かになると思います。

エヴァンスの音楽を表現する上で、叙情性（リリシズム）とか、耽美的、繊細さ、といった言葉が多く使われます。確かに、ある時期からの演奏、特にバラードにはそうした要素が強く見られるので、エヴァンスの音楽要素の大きな部分を表現しているのは確かです。しかし、ジャズシーンに登場した頃のエヴァンスはそうしたイメージとはかなり違った面を持っていました。

◎デビュー作の衝撃

リーダーアルバム2枚目となるEverybody Digs Bill Evansには、典型的なエヴァンスの演奏を聴き慣れた耳にはかなり刺激的な音楽が詰まっています。まず、コール・ポーターの名曲Night And Dayを聴いてみましょう。

<https://www.youtube.com/watch?v=Y510fnS8UIU&list=PLvxWibFrOwiKv-9j8emkm9xmeDvyutnxE&index=4>

まずタッチの強さに驚かされます。1分ジャストくらいでテーマのサビをコードで弾き、1分25秒あたりでテーマが終わるあたりまでは激しいくらいに鍵盤を叩いている感じです。とても繊細な感じではありません。アドリブコーラスに入って単音アドリブが始まりますが、これも強烈でハンマーがすごいスピードで弦を叩く時ならではの音質です。

3分1秒付近からエヴァンスの代名詞でもある両手のコードワークによるアドリブが始まり、ベースソロを挟んで4分28秒辺りからもそう弾いています。後年のエヴァンスほど複雑な音は使っていませんが、当時としては斬新な響きに感じられたはずで、アルバムが吹き込まれた1958年といえば、ウィントン・ケリーやソニー・クラーク、ホレス・シルヴァーなどバリバリのハードバップやファンキーのピアニストが活躍していた時代です。そこにこういうピアノサウンドが出てきたのですから、それは衝撃だったでしょう。

スコット・ラファロ(b)、ポール・モチアン(ds)とトリオを組んだ以降のエヴァンスファンからすると好みではないというリスナーもいると思いますが、自分には何度でも聴きたくなる吸引力のある音楽です。

演奏内容とは関係ないのですが、4分40秒付近からは何と唸りのような音が聴こえるのに気が付きました。5分辺りではかなりボリュームも上がってはっきり唸りだと分かります。ベースとドラムが休んでいるところで聴こえますから間違いなくエヴァンス本人でしょう。これは意外でした！そう思って聴くと、2分台から唸っているようですね。キース・ジャレットと違って(笑)自分は気になりません。

Everybody Digs～以降、エヴァンスはどんどんハーモニーを深化させクラシックも含めてそれまでどんなピアニストも出せなかった複雑な美しさの響きを生み出して行きました。一言で言うなら、それまでのセオリーにはなかった音、誰も試してみなかった音をいくつも加えることで、複雑で説得力のあるサウンドを生み出したということです。

コードには、ドミソシ(Cメジャー7)やソシレファ(G7)などコードのタイプごとに使える音が決まっていて、それ以外の音を加えると歪んだ不協和音になるということになっていました。ところが、そうした音も組み合わせ方、使い方によっては鋭くも美しい響きに感じられることを、文字通り発見したのです。

例としてピアノだけによるハーモニーを聴けるソロピアノで、その一端を確かめてみましょう。Bill Evans Aloneというアルバムに入っているOn A Clear Day (You Can See Forever)というスタンダードです。

<https://www.youtube.com/watch?v=DE3EISknKXg>

◎協和と不協和のバランスが絶妙

40秒の所で弾かれるコード(一番最初のコードも同じ)はなんだか歪んだような鋭いようなサウンドがしますよね。オリジナル曲ではソから始まるドミソであるソシレという和音の上にメロディのラが乗っているのですが、エヴァンスはシを半音下げてマイナーにして、さらにbレ、bミというセオリーではあり得ない音を加えています。

一応五線譜もつけたので興味のある方は見てください。1小節目がエヴァンスのヴォイスिंग、2小節目がオリジナルコードに基づいた常識的なヴォイスिंगです。かなり違うのが分かります。

<http://jazzlydian.com/mailmagazine/evanstension.png>

他にも、ハーモニーの中の最も高い音であるトップノートの下に、半音下の音を入れてはいけないというセオリーも無視しているところがありますし、やりたい放題というか、まさにエヴァンスならではの音使いです。

こういうサウンドは多用すると、あまりに汚いと感じる可能性が高いのですが、エヴァンスは普通に美しい響き、少し尖った響きも含めた曲の流れの中に要所でポンと入れてくれるので、多くの人是不協和過ぎると感じないようにしている(もちろんそう感じる人もいでしょう)、そのバランス感覚がスゴイのです。

その意味で、エヴァンスの功績は絶大なもので、エヴァンス以降のピアニストで影響を受けていない人はいないでしょう。今私達が現役ジャズピアニストの素晴らしい演奏を聴けるのも、エヴァンスが残してくれた独特の素晴らしいサウンドを何らかの形で受け継いでいるからとも言えます。

書いていて、エヴァンスフェイヴァリットの最右翼で、いつも素晴らしい演奏を聴かせてくれる田窪寛之さんのピアノを聴きたくなりました。5月に予定していたソロライブは残念ながら中止となりましたが、7/29にもソロライブがあります。是非一度は聴いていただきたいピアニストです。

いつも感じることですが、音の響きを言葉で伝えることは本当に難しいものです。これ以上書くと長くなってしまいそうなので、今回はこれまでにします。

最後に番外編として女流ジャズピアニストのマリアン・マクパートランドがエヴァンスにインタビューするという興味深い動画があったのでご紹介します。残念ながら自分の英語力ではほとんど内容が分かりませんが(笑)、エヴァンスの肉声を聴けるという意味では貴重だと思います。

<https://www.youtube.com/watch?v=2zufMaufJZo&t=1320s>

以上